

楡 周平

Cの福音



C の 福 音

楡 周平

にれ しゅうへい：1957年生まれ。現在、米国大企業日本法人に勤務。東京在住。

Cの福音

1996年2月9日 第1刷発行

1996年3月20日 第4刷発行

著者：楡 周平

イラスト：山下セイジ 装丁：岩田友仁

発行人：蓮見清一 発行所：株式会社宝島社

〒102 東京都千代田区麴町5-5-5 電話：営業部 03(3234)4621／編集部 03(3239)0204

振替：00170-1-170829(株)宝島社

印刷：壮光舎印刷株式会社 製本：田中製本株式会社

落丁・乱丁本はお取替いたします

1996 ©, Printed in Japan ISBN4-7966-1064-2

定価1500円

C
の
福
音

謝
辞

J. C. H. L. の米国での更生施設にいる麻薬中毒患者たちへの取材や、T. S. の銃に関するアドバイス。君ら友人たちの献身的な協力なくしてこの小説が完成することはなかったであろう。

目
次

C
の
福
音

第一章

CADAVER ……死体

7

第二章

CADET ……息子

51

第三章

CALL ……コール

85

第四章

CARGO ……積荷

109

第五章

CALAMITY 慘事

169

第六章

CONFESSION 自白

219

第七章

COFFIN 棺

273

第八章

COMBAT 戰鬥

311

第一章

CADAVER — 死体

1

一二月下旬の朝、マンハッタンの南端にあるバッテリーパーク近くの波止場から出港したスタテン・アイランド・フェリーは、アッパー・ニューヨーク・ベイとハドソン川との汽水域を斜めに横切る形で、自由の女神を目指して進んでいた。

一階のキャabinは、首からカメラをぶら下げ、一目でそれと分かる観光客で埋まっていたが、寒風の吹きすさぶ見晴らしのいいアッパーデッキには、さすがに数えるほどの乗客しか見えなかった。

時計は朝の九時四〇分ちようどを指している。真冬という時期であることを考えても乗客の数が少ないのは、ちょうどクリスマス・イヴにあたった昨夜、この街の享樂と頹廢、絶望と栄光の

一夜を貪^{むさぼ}った人間がいかに多いかを如実に物語っていた。

「おい、あれを見てしろよ、メリー」

濃いブラウンの堅い髪を、デッキを吹き抜ける強い寒風にあおられるにまかせながら、ボブ・ケンパーはいま自分が上がってきたアップパーデッキに続く階段に向かって、興奮した声を上げた。赤ら顔がみるみるうちに色を濃くしていったが、それは寒風に素顔を晒しているせいばかりではなかった。

港を出て一〇分、いまボブの目の前にはマンハッタンの南端に立ち並んだ摩天楼の群れが、まさに仰ぎ見る形で広がっていた。朝日を全面に浴び、銀色に光り輝くツインタワー。それに連なるビル集合体。いずれも周囲との調和という点に関して言えば、さしたるコンセプトもなしに作り出されたものには違いなかったが、無秩序な造形も数が集まると秩序を生み、人工的な美となる。そしていま、その姿は人工的な美を通り越し、むしろ神々しいまでの輝きに満ち溢れて、あたかも一つの巨大な生き物が、絶えず呼吸をしているかのように見えた。

ケンタッキー州レキシントンの郊外で、六〇になるまでの人生の大半を一介の農夫として過ごしてきたこの男にとって、それはまさに初めて見る光景であった。

ボブは顔にあたる寒風に口元を歪めながら、昨日タイムズ・スクエアで買ったばかりのキャノンのイオスを摩天楼に向かって構えると、ズームレンズを調節しながら続けざまに二回シャッターを切った。

「体が凍りそうよ、ボブ」

今年五七になる妻のメリーは頭に被った大きめのスカーフを片手で押さえ、もう一方の手で階段の手摺りを掴みながら、アップパーデッキに上がってくるなり非難がましい声を上げた。

「見ろよメリー、素晴らしい眺めじゃないか！」

メリーの声を気に留める様子もなく再び興奮した声で言う、ボブは傍らにやってきた妻の肩をいくつかの手で抱き寄せた。

ボブの大きな体が風よけになり、メリーにもやとあらためて摩天楼の奇観を眺める余裕ができたらしい。大きな夫の胸に頭を凭せかけるようにしながら光輝くツインタワーを見ているうちに、思わず「素晴らしいわ、ボブ……これがニューヨークね……」とつぶやいていた。

「どうだ、来てよかっただろう」

ボブは妻の体を一層強く抱き寄せると、マンハッタンに目を向けたままそう言った。

最初メリーは今回のニューヨーク行きにはあまり乗り気ではなかった。保守的なケンタッキーという土地に生まれ育ち、家事と農業に従事してきたメリーは、そもそもが変化や刺激を求めるタイプの女ではなかった。

ケンタッキーの冬はニューヨークとそう変わらない。毎年とはゆかぬまでも、これまで夫婦で冬の一時期のバケーションを過ごすのは、大抵温かいフロリダあたりと決まっていた。優雅という言葉からはほど遠いバケーションではあったが、何度か同じ場所ですぐ冬の一時期を過ごすうちに馴染みの貸コテージもでき、それなりに休日を通ぐす算段も身についていた。それが今年はボブの発案で急速ニューヨーク、それも真冬という季節にである。当然、費用が嵩む分だけ滞在期間も短くなり、バケーションというよりも「観光旅行」といった言葉があたっているほど、日

程的にもせわしないものになっていた。

それでもボブが言うように、確かに来てみるだけの価値はあったわ、とメリーは思った。昨夜見たブロードウェイのミュージカル『オペラ座の怪人』は素晴らしかったし、メトロポリタン美術館やグッゲンハイム、そして値段の高さにびっくりするばかりで買物物はできなかったけれど、五番街やブルーミングデールもたのしかった。

一度こうした街にやってくるのも悪くはない……。でも、もうニューヨークは十分に満喫したわ……。

メリーは滞在一週間でこの街のすべてを見た気になっていた。

「そうね、でも二度はいやよ、ボブ」

メリーが含み笑いとともになんて言うかと、

「なんだい、その気のない返事は……まあいいさ、そうだと写真を撮ってやろう」

ボブはメリーの肩を優しく揺さぶるとその手を離し、摩天楼を背にデッキの端に立つように言った。

メリーは、デッキ沿いにぐると張りめぐらされた手摺りに凭れかかるようにして立つと、片手で寒風にはためくスカーフを押さえながらポーズを取った。

「O.K. さあ撮るよ」

ボブはイオスを構え、二、三步右へ位置を探った。一瞬カメラが水面の方向を向いた。……瞬間、ファインダー越しに、舷側から少し離れた所を、わずかにその姿を水面に覗かせながら浮遊していく物体が、ボブの視界に飛びこんだ。

ボブはゆっくりとカメラを下ろすと舷側に寄り、水面に目を凝らした。

船が立てる波間を、そのうねりのリズムに合わせるように、その物体は漂っていた。

それは最初、単なるグレーの布の包みのように見えたが、波に揉まれる様子を見ると、微妙な質感があるように思われた。

「どうしたのボブ。撮るんなら早くしてよ。私、もう凍えてしまっそうよ」

メリーは非難の声を上げた。

「ちよっと黙って」

ボブの緊張した口調に、メリーも怪訝な表情でその方向に視線を向けた。

「あれはなんだ……」

ボブは再びイオスを構えると、ファインダーを覗き、そのズームを一杯にしてシャッターを軽く、いかつい不細工な指で押した。軽やかなモーター音とともにフォーカスが調整され、ピントが合ったことを知らせる電子音が鳴った。

ファインダー一杯にわずかに水面に浮いたグレーの布地、そしてそこから覗く肌の色が見えた。その先に波間に漂う藻のようなもの……なんてこった、あれは髪の毛じゃないか。

「ボブ、どうしたの。あれは一体……」

メリーの不安げな声を制するように、慌ててカメラを下ろすと、

「ワッタ・ヘル……とんだニューヨークのフルコースだ」

ボブ・ケンパーは罵りの言葉を吐き捨てると、

「キャプテン！ キャプテン！」

叫びながらデッキを駆け、*「関係者以外立入禁止」*と書かれたドアを、いかつい体でぶち破らんばかりの勢いで押し開けると、操舵室へ飛びこんでいった。

2

ニューヨーク市検視局の四階にあるオフィスでレスリー・ウォーカーは、その日三通目の死体解剖検案書をマッキントッシュにインプリントしていた。検視官の一人であるドクター・ジェームス・マーフィーが解剖を行ないながら所見をレコーディングしたテープを聞き取り、それを所定のフォームに従ってタイプアップしていくのが彼女の仕事だった。それは実に事務的で単調な作業だった。

検案書は九分通り出来上がっていた。レスリーは手を止め、すでに冷め切ったデ・カフェの入ったマグを手にとると、一口すすり、小さく溜息をついた。

「クリスマスだって言うのに、まったくいやになるわ」

この国のほとんどの人々がクリスマスを家族とともに過ごし、そのまま年末のバケーションに入るといって、一年でも一番たのしい時期に、こんな書類を作成しなければならない自分の仕事を、レスリーは心底呪った。

「殺しだか事故だか知っちゃいけないけど、時期を考えてやるべきよ」

レスリーは画面に目をやりながら毒づいた。

ひと一人の死因を記した検案書には、物言わぬ死体からこの世に残された人間たちへの最後の

メッセージが書き記してある。一見したところ事故死と思われる事件が、科学的な分析によって他殺と判明することも珍しくはない。そうした意味では、いまレスリーが作成している書類も、隠れた陰謀や犯罪を暴きだす第一歩となるかもしれない重要なものであった。しかし検視局に勤めて九年、毎日同じ書類を何枚となくタイプアップしているレスリーにとっては、この書類が持つ重要な意味など、とうの昔に失われてしまっていた。

それだけこの街で発生する殺人の数は多すぎたのである。

いま彼女の頭の中には、このやっかいな書類をタイプアップして、一刻も早く家族の待つ家へ帰ることしかなかった。

レスリーは机の上に置かれた時計を見た。

「いけない、もう四時だわ」

レスリーは指の動きを速め、猛烈な勢いでマッキントッシュに向かって文字を打ちこみ始めた。「レスリー、検案書は仕上がったかね」

白衣の前をだらしなくはだけた検視官のマーフィーが、齢の頃四十半ば、薄汚れたトレンチコートをおった、あまりパツとしない男とともにやってきた。頭の禿げ上がった今年五二になるこの医師の顔にも疲労の色が浮かんていた。マーフィーは今日レスリーがタイプアップした死体の解剖にすべて立ち会ってきたのだ。

「ええ、もうほとんど。あとはスペルチェックをかけるだけですわ」

レスリーはマウスを操作し、画面の上のメニューからスペルチェックを選び、実行した。

画面上に風車を図形化した小さな円が現われ、くるくると回転し出すと、レスリーの打ちこん

だスベルをチェックし始めた。

「ドクター、で、なにか分かりましたか」

トレンチコートを着た男がマーフィーに聞いた。

男はニューヨーク市警の警部で名をゴードン・グリーンフィールドといった。

今朝、スタッテン・アイランド・フェリーからの連絡を受けて、死体の回収に立ち会い、この事件を担当することになったのだった。

「死因はコカイン使用による急性中毒。外傷は特には認められなかった」

「コークね、なんてこった。ドラッグで昇天しちゃったおめでたい男のために、クリスマスのさ中、こうして忙しい思いをしなけりゃなんてわけですか」

ゴードンはネクタイを弛め、薄汚れたワイシャツの襟のボタンを外しながら、吐き捨てるように言った。

「解剖の結果分かったんだが、どうもこの男はコークの常用者だったようだね」

「ジャンキーってわけですか。そいつあなんとも結構な話ですな。少なくともこれで一人コークの使用者がこの世からいなくなったってわけですからな」

ゴードンは冗談とも本気ともつかぬ口調で言うのと、

「しかしそのジャンキーがなんでまた……量を間違えるヘマでもしでかしたってわけですかね」

「いや、どうも極上のやつを静脈に注射したらしい。腕に注射の跡があった」

「馬鹿なやつだ。クリスマス気分になんて浮かれて、もっとハイな気分になろうとしたってわけですか」